

平成24年度 学部学位記授与式 学長告辞

本日、晴れて学位記を授与された、660名の皆さん、誠におめでとうございます。

京都工芸繊維大学を代表し、心からお祝いの意を表します。

また、これまで、皆さんを支え、育ててこられたご家族の皆様はじめ、本日駆けつけていただいた関係者の方々に対し、心からお祝いを申しあげたいと思います。

本学の卒業生は、これまでも、専門分野における基本知識と専門技能をよく修得し、優秀な技術者としてのキャリアを踏み出していきました。これは企業や社会から定評を得ている事実であり、私たちは、皆さんの能力や知識について、自信と確信を持っており、心配もしておりません。もし一抹の不安があるとすれば、それは、あなた方が、やり残した実験や資料収集のことではありません。そうではなく、自然や物質を相手にした科学技術に熱中するあまり、人間とは何か、自分とは何か、愛とは何か、といった人間や社会にとって重要な課題を、面倒なものとして、ときには無意識に、ときには意識的に、正面から向き合ったことがないのではないかという反省です。専門分野の学習や研究に費やした時間に比べると、人間や社会について、深く悩み、自ら思考した時間が、あまりにも少ないのではないかという反省です。

1 パノプティコンについて

卒業生諸君は、いよいよ今日から社会に旅立つことになります。諸君は、京都工芸繊維大学が掲げる人材養成の目標、「国際的に活躍できる高度専門技術者」にふさわしい人材としての技能、知識、能力を身につけたと確信できますか？ もちろんできます。できるはずであります。私たちが、諸君ら一人一人について卒業認定を行い、本日一人一人に学位記を授与するということは、京都工芸繊維大学が、諸君の能力を認定し、ひいては、日本国がそれを保証していることを意味します。このことを自覚し、自信を持って社会に出ていただきたい。社会を恐れることはありません。同時に侮ってはいけません。

君たちが自分の能力を十全に発揮するためには、現代社会の特徴を把握し、自覚と覚悟を持って社会に出ることが大切です。

かつて、モノづくりの典型は、フォーディズムと呼ばれていました。T

型フォードの生産で導入された、分業、流れ作業、大量生産、低価格、によって車社会が実現しました。

一方、現代のモノづくりは、ポスト・フォーディズムの時代と言われます。すなわち魂の労働が求められる時代と言われます。生産現場と消費現場が直結し、外国のスーパーマーケットの窓口における消費者のクレームは、その日のうちに生産現場に改善策として届けられます。このように生産活動の中に消費者の視点を直ちに組み込むことが求められる時代です。世界の果ての見知らぬ他者の要求に応えることが求められる時代なのです。

魂の労働は、次のような具体的事例で示すことができるでしょう。

ここに二つの教室があります。同じように前を向いた学生が、自習をしている。部屋の大きさや形、席の配列も同じです。ただ、第一の教室では、教授が前の教壇に立っているが、第二の教室では、教授の姿が見えない。おそらく部屋の後ろにいるらしい。この違いは、些細なように思われるかもしれませんが、実は、非常に大きいものです。第一の教室では、教授は前にいるため、学生は監視されているという意識から抜け出せない。では第二の教室ではどうか。監視の教授が見えないのであるから、自由な活動ができそうに思われますが、実はそうはいかないのです。

というのは、監督者の姿は見えないが、監視の視線だけは感じられる空間にいと、やがて監視の視線は学生の内側へと内面化していく。一人一人の学生は、自分自身が監督者の役割を引き受けることになっていく。さらに評価による圧力が、学生たちを競争に駆り立て、教室を自由競争の場へと変えていく。監督者の姿が見えないということは、監視の視線がいたるところに偏在していることになり、取り立てて休み時間は設けられていないため、四六時中活動することもできるし、自由に休息することもできる。こうなると結果的に休みを取る事がなかなかできません。

歴史的に言えば、第一の教室は前近代、第二の教室は近代のモデルです。第二の教室は、ミシェル・フーコーが分析したパノプティコンの機能と同じであり、第一の教室は、革命以前の絶対王政の時代のモデルです。王であれ、神であれ、教授であれ、部屋の前に立って指示を出す人物を核としてピラミッド状に空間が秩序化されています。

第二の教室では、監督者の姿は隠れています。したがって構成員を秩序づけるのは、監督者ではなく、構成員相互の競争、自由競争という名の動的秩序なのです。やがて競争の目標は内面化され、他者との戦いよりも自分との戦いが重視されるようになります。追いつかれる自分と追いつこう

とする自分が同居している。これが近代人の特徴なのです。我々は自分の中に、見る自分と見られる自分、監視する自分と監視される自分、罰するものと罰されるもの、生産者と消費者を同時に抱えているため、これら二つの間の落差を埋めようとして、走り続けることになるのです。

この結果、モノづくりの現場における労働の質は大きく変化しました。現代では魂の労働と呼ばれるような全人的な労働が要求されるようになります。かつて管理と労働が分離していた時代、労働と休息が分離していた時代、こうした規律型社会と呼ばれていた時代にあつては、社会からの脱落者を救済するためのシステムが準備され、脱落者を回復させ、回収し、再び社会に包摂しようとしていました。しかし現代の管理型社会においては、自由競争を阻害する要因は除外され、排除されていきます。だからこそ、絆が強調され、ボランティア、コミュニティといった競争原理ではない関係の在り方が求められているのかもしれません。

その意味では、近代社会の基礎となったフランス革命の3つの旗印「自由、平等、友愛」のうち、とりわけ友愛が強調される時代なのかもしれません。自由な活動は、経済的不平等をもたらし、経済的不平等を是正するためには、自由競争に制限を加えることになる。自由と平等は互いに調停することが難しい時代なのです。平等が自由の歯止めにならない時代にあつては、友愛への期待は大きく膨らんでいきます。

自由と平等の矛盾を超えるものとしての友愛への期待は、大学の同窓生諸君への期待と共通したものがあります。なぜなら、大学は、卒業生は、友愛という絆で結ばれているからです。

2 友愛について

いま、松ヶ崎キャンパスに隣接して、新たな学生寮を建設中です。これまでなかった女子の学生寮と留学生を含む300人規模の学生寮がもうすぐ完成する予定です。この寮が完成するまでには、多くの人の努力と尽力がありました。とくに京都ノートルダム女子大学とは、さまざまな形での連携・協力がありました。一方、平成26年度からは、京都府立大学、京都府立医科大学、京都工芸繊維大学の3大学による教養教育の共同実施が開始されます。今日では、大学相互が協力し合い、共同研究、共同教育を実施する時代となっています。大学相互の連携は、いわゆる経済協力というよりも、友愛精神による協力関係と呼ぶべきものです。

しかし、友愛精神の最たるものは、今日この場にお集まりの皆さんであります。

友愛の語源となったフラタニティ（女性の場合はソロリティと言われま

す)は、家族や地域の共同体とは別に、個人個人が見出すものとされています。同じ学寮の出身者は文字通り同僚であり、同じ釜の飯を食べた仲間、苦楽を共にした共通体験で結ばれた学友は典型的な友愛の仲間であります。我々は、同じ大学に学んだ同窓生ではありますが、経済的な利益で結ばれているわけではありません。我々は共通体験と共通の思い出を持つ人間の集まりであり、いわば思い出の共同体の構成員なのです。

母校への愛情は、自らの人生とこれからの活動に自信と誇りを与え、より困難な課題、より高い課題に取り組む勇気を与えてくれます。卒業生の皆さんは、私たち教育者の誇りであり、京都工芸繊維大学が世界一の大学であるという確信を持って、卒業していただきたいと思います。

そしていつの日か、世界のどこかの街角で、どこかの会議室で、どこかの工場で、再びお会いできる日を楽しみにしています。

平成25年3月25日
京都工芸繊維大学長
古山正雄